

東京都美術館 ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No. 479

Interview

村治佳織

MURAJI Kaori



**日本を代表するクラシック・ギタリスト、
村治佳織さん。15歳でのCDデビュー以来、
世界を舞台に活躍し続けています。**

**日本と海外を行き来し、音楽活動を通して
さまざまな文化・芸術にふれてきた
村治さんならではの、美術鑑賞の魅力や
楽しみ方をうかがいました。**

MURAJI Kaori—one of Japan's leading classical guitarists, active on the world stage since her CD debut at age 15. We asked Muraji about art's appeal and her approach to enjoying it as someone who travels overseas and experiences different cultures and arts through her musical activities.

音楽を入りに広がった 絵画や美術館への興味

私にとってアートへの入り口は、やはり音楽でした。16歳の夏休みに初めてルーヴル美術館を訪れたときに、当時よく演奏していた音楽とほぼ同じ時代に生まれた絵画をみるのが、音楽表現を深めるうえで大変参考になりました。「あの作曲家と同じ時代を生きた人が描いた絵画」「当時はこんな風景だったのか」という関心から始まり、「この絵の背景は?」「どんな心情で描いたのだろう」「ステンドグラスから差し込んでくる光まで素敵!」と、どんどん興味が広がっていきました。そうすると、絵を解釈するために、その画家はどこで生まれ、どんな人生を送ってきたのかも知りたくなり、調べるようになりました。きっかけは音楽でしたが、美術館を訪れ絵画の素晴らしさを知るにつれ、「音楽のための勉強」という見方ではなく、純粋に絵画を味わい、美術館そのものを楽しむようになったのです。

思い起こせば小学生のころに、地元・台東区の児童・生徒の絵画展をクラスメートと一緒にみたのが人生初の美術館訪問でした。確かあれは、東京都美術館での展覧会だったんですよね。その後も留学や演奏活動で訪れたまちでは、必ずといっていいほど現地の美術館に足を運んでいます。素晴らしい所蔵品もさることながら、建物そのものが美しいし、内部の装飾も造り込まれていることが多く、全体的に“良い気”が満ちていると感じます。カフェやショップだけ利用しに行くこともあるぐらい、美術館の雰囲気大好きです。

目にみえる「絵画」から 目にみえない「音楽」への転換

長期滞在が多かったフランスでは何度かオルセー美術館にも訪れましたが、初めてミレー

音楽への探求心から開かれた絵画への扉
目にみえない音楽とみえる絵画、
双方の接点を求めて

The door to paintings, opened by an inquisitive musical spirit.
Exploring the interplay between invisible music and visible painting.



村治 佳織(むらじ・かおり)

東京都出身。クラシック・ギタリスト。幼少のころより数々のコンクールで優勝を果たし、15歳でCDデビュー。高校卒業後はパリの音楽院で学び、帰国後はソロ活動を開始。2003年には日本人で初めて英国の名門レーベルDECCAと長期専属契約を結ぶ。2018年、アルバム『シネマ』で日本ゴールドディスク大賞を受賞。2023年10月にはデビュー30周年を記念して、ファン投票で選ばれた曲をランキング順に収録した『Canon～オールタイム・ベスト』をリリースし、話題を呼ぶ。著書に『いつのまにか、ギターと』(主婦と生活社刊)ほか。



の《晩鐘》をみたときのことは今でも覚えています。畑仕事が終わった夕暮れどき、男女が祈りを捧げているような絵なのですが、みているうちに夕陽のあたたかみがじんわりと伝わってきて、ほのかに体温が上がってくるような感覚をおぼえました。絵から実際にあたたかさを感じる体験をしたのは初めてだったので、これも絵画の魅力なのだと感動したものです。

絵画を鑑賞するときは、色彩の豊かさや線の力強さ、筆の運びに目がいくことが多いです。特にピカソやムンクの絵をみたときには、ひと筆の力強さというものに圧倒されました。同時に、作風の変化にも目を引かれました。初期のころの緻密に描かれたデッサンなどをみて、才能豊かな方は基礎がしっかりとしているからこそ、さまざまな表現ができるのだと実感しました。何より基礎を大事にすること、それは私たち音楽家にも言えることです。

10代のときに師事していた先生からは、「ステージに立つときは、お客様の前に白くて透

明なキャンバスがあって、そこに色(音色)を塗っていくことをイメージして」と教わり、以来ずっとその感覚を意識しながら演奏しています。

いかに「色(音色)を塗っていくか」というイメージづくりは、やはり絵画からの影響が大きいと思います。今までふれてきた絵画は、目からみて、脳で吸収され、意識せずともギターの音色を出すときに活かされているはず。目にみえる絵画からみえない音楽への転換です。音楽家として表現力を広げていくために、これからでもできる限り多くの絵画を鑑賞し、さまざまな刺激をもらいたいと思っています。

次にいつ会えるかわからない 絵画との出会いを大事にしたい

現在、もっとも好きな画家の一人が藤田嗣治です。藤田の作品は、色使いもそうですが、特に筆の運びに目を奪われます。この細い線はどんな筆で描いたのだろうと考えたり、線を指で追ったりも。2018年に東京都美術館で

拝見した「没後50年 藤田嗣治展」は作品数も多く、みごたえがありました。もともと藤田の『随筆集 地を泳ぐ』という著書を読んで戦争に翻弄された画家であることは知っていたのですが、猫や少女を題材にした可愛い絵とともに、戦争を描いた絵画を初めてみるのができたのは貴重な経験でした。

スペインを代表する画家の一人であるミロの展覧会が来年3月から東京都美術館で開催されると聞き、とても楽しみにしています。20代終わりに長期滞在していたマドリードでは、住まいから徒歩圏内にプラド美術館などがあり、よく出掛けたものです。スペインは日差しが強く、空の色も濃く、風景も街並みも色鮮やか。そんな光景をみて育った人が創りあげる芸術ですから、鮮やかな色使いや大胆な構図が多いのもうなずけますよね。

「ミロ展」を楽しみにしている理由がもう一つ。今年の6月に作曲家の武満徹の《虹へ向かって、パルマ》という曲を演奏する機会があったのですが、この曲はミロの同名タイトルの絵画に着想を得て作曲されたものなのか。武満はこの作品と、ミロの素朴な人柄に惹かれており、ミロが亡くなったときに哀悼の意を込めて書かれたとお聞きました。

私は時折、海外の美術館でみた作品に日本で再び出会うことがあり、そんなときはとてもうれしく、ありがたく感じます。人との出会いと一緒に、「次にいつ会えるか分からないから、きちんと向き合おう」という感覚でいるので、再び会えたときは感慨もひとしおです。

絵画との出会いも一期一会。次にミロの作品といつ会えるか分からないから、今回の「ミロ展」もしっかりとみておきたいと思っています。その時は武満のあの曲をもう一度聞いてから訪れるつもりです。

start

For me, the doorway to art was music. When studying 16th-century music in France, I made a point of viewing paintings of the era when the music was composed, to deepen my musical expression. It all started with music, but as I visited museums and came to know how splendid the paintings are, I genuinely began to like paintings and enjoy museums. When viewing Millet's work *The Angelus* for the first time, the warmth of the sunset in the painting slowly penetrated my being, and I felt my body temperature faintly rise. This too is the power of painting, I thought, amazed.

The teacher I had as a teenager told me, "When you stand on stage, imagine there is a white, transparent canvas between you and the audience on which you are going to paint colors and tones." This approach to creating a musical image by painting with colors (tones) demonstrates the large influence that paintings have had on me.

One of my favorite painters these days is FOUJITA Tsuguharu. I was struck deeply by the exhibition "Foujita: A Retrospective — Commemorating the 50th Anniversary of his Death" held at the Tokyo Metropolitan Art Museum in 2018. To see paintings of war, for the first time, together with cute paintings of cats and girls was a valuable experience for me.

I am excited to hear that an exhibition of Joan Miró, the great Spanish painter, will be held at the Tokyo Metropolitan Art Museum from March next year. I had opportunity in June to perform a piece by composer TAKEMITSU Toru called *Vers, l'arc-en-ciel, Palma*, a song inspired by the Miró painting of the same name. I plan to listen to Takemitsu's song again before going to see the exhibition "Joan Miró."



ミロ展

Joan Miró

会期

2025年3月1日(土)～7月6日(日)

展覧会公式サイト

<https://miro2025.exhibit.jp/>

展覧会の舞台裏

Creating Exhibitions

毎年、11月半ばから年末年始を挟んで翌年1月初めにかけてギャラリーAとCで開催している「上野アーティストプロジェクト」。今年は「ノスタルジア—記憶のなかの景色」（会期：2024年11月16日[土]～2025年1月8日[水]）と題し、「ノスタルジア」をキーワードにして、8人の作家を紹介しています。現在開催中の展覧会を、ちょっと懐かしい舞台用語を織り交ぜながら、公演の舞台裏になぞらえてご案内します。

The "Ueno Artist Project"—a special exhibition organized by the Tokyo Metropolitan Art Museum. Held annually in Gallery A and C from mid-November to early January. This year, the exhibition titled "Nostalgia —Scenery in Memory" (Nov. 16 [Sat], 2024 – Jan.8 [Wed], 2025) explores the theme of "Nostalgia" through works by eight artists. Below, we look "behind the curtain" at the exhibition, now being held.

「ノスタルジアの舞台裏から」

Behind the curtain: the making of "Nostalgia"

「役者、配役、出し物」

今回の展覧会では、大正生まれの入江一子さん、昭和前期生まれの久野和洋さん、第二次大戦後生まれの玉虫良次さん、宮いつきさん、芝康弘さん、阿部達也さん、平成生まれの南澤愛美さん、そしてベラルーシ出身の近藤オリガさんまで、公募展で活躍する幅広い年代と経歴の作家にご登場をいただきます。テーマ（ノスタルジア）が決まったら、大事なのは役者の配役（キャスティング）です。これまでの実績や作品をよく吟味しながら、世代のバランスも考えつつ出品作家を選定しました。基本的に展示の順番と各作家の展示エリアの割当は学芸員が決めますが、出品作品と配置は各作家とよく協議しながら決定します。ノスタルジア展にふさわしい題材とイメージの作品を希望することはもちろんですが、作家の意向、作品の保存状態、今どこに収蔵されているか、用意したスペースに作品が収まるかどうかなどを総合的に考慮して、出品リストが何度も修正されて少しずつ固まっていきます。それ以外でも、他の展覧会との競合、そして所蔵者の意向等により、最初の希望通りに実現できるとは

限りません。作品を実見すると、図版で見たイメージとは全く違うこともよくあります。また、出品作品が1点変わること、作家紹介の順番や壁面全体を変えざるを得ないこともあります。この配役と出し物次第で、全体の印象がずいぶん変わっていきます。

「大道具、小道具、仕込みとバラシ」

作家の内諾が取れて出品リストの大筋が固まったら、次に輸送と展示の準備に入ります。出



芝康弘《六月の詩》2011年
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
SHIBA Yasuhiro, *Poem of June*, 2011,
Tokyo Opera City Art Gallery



近藤オリガ《月下のレモン》2022年 個人蔵

KONDO Olga, *Lemon Under the Moon*, 2022,
private collection

品される絵画の所在は各作家のアトリエとは限りません。個人所蔵者の家や倉庫、ギャラリー、美術館など、全国各地さまざまな場所に保管されていますので、それぞれの所蔵者と借用交渉を行い、集荷、展示、撤去（バラシ）、返納の予定を組む必要があります。舞台用語で「仕込み」とは、大道具や照明の装置を組むことですが、展覧会の場合はその前に美術品を借り集めることが大仕事なのです。出品作品は、芝居であり、役者そのものでもあります。

作品の目途が立ったら、大道具、小道具と照明のセッティング、すなわち展示空間の施工に入ります。どのような舞台装置を組めば役者の演技が生きるか、照明はどうすれば効果的かなどを検討します。役者の衣装やメイク、そしてさまざまな小道具等は、展覧会でいえば、キャプション、額装、解説パネル、年表パネル、展示ケースなどが対応するでしょうか。役者と違って作品は動きませんので、絵の高さ、絵と絵の間隔、バ

ランス、明るさなどには特に慎重さを要します。美的効果を重視する点では、舞台も展覧会も変わりはないと思います。計画は慎重に練り上げて何度もシミュレーションしますが、いざ本番になるとアドリブで作品配置を変更することもしばしばあります。できる限り美しく、役者（作品）の演技が映える舞台にしたいからです。

「ノスタルジアという舞台空間」

「ノスタルジア(nostalgia 英語で郷愁、懐かしさの意味)」とは、もともとギリシャ語の「ノストス(家に帰ること)」と「アルゴス(痛み)」の合成語で、故郷へと帰りたいが、けっして戻れない心の痛みのことを意味します。さらに、現代では二度と戻ることができない過去（子ども時代など）の記憶を、現在の風景や情景に重ね合わせて味わう複雑な感情のことをいいます。甘酸っぱくも後悔を含んだ気持ち、そして必ずしも過去を懐かしがるだけでなく、初心を思い出すことで精神をリフレッシュさせて、元々持っていた理想や希望を再生させるプラスの感情も含みます。さまざまな世代と地域の絵画を鑑賞し、その作品世界に入り込むことでノスタルジアを感じ、子どものころの記憶と気持ちを思い出していただければと考えています。コンサートや舞台空間のなかで演奏家、役者と観客が一体になれるように、この展覧会においても、皆さんが絵画空間に包まれて、ほろ苦くも心地よいひとときを過ごしていただければ幸いです。

(東京都美術館 学芸員 山村仁志)

Featured will be four male and four female artists of widely varying generations and backgrounds now or previously active in the Museum's Public Entry Exhibitions. Two are longer living: IRIE Kazuko, born in the Taisho (1912-26) period, and KUNO Kazuhiro, born in the early Showa (1926-45) period. Four were born after World War II: TAMAMUSHI Ryoji, MIYA Itsuki, SHIBA Yasuhiro, and ABE Tatsuya. One, MINAMIZAWA Aimi, was born in the Heisei (1989-2019) period, and one, KONDO Olga, hails from the nation of Belarus.

The word nostalgia is a compound of the Greek *nostos*

("homecoming") and *algos* ("pain"). It originally meant the emotional pain of being unable to return to one's homeland. Today, the word refers broadly to the complex emotions we feel when present-day landscapes or scenes evoke memory of past times forever gone. This exhibition seeks to awaken viewers' memories of childhood through exposure to paintings by different generations of artists. We hope you will grow immersed in the space of the paintings—in the same way musicians, actors, and audience unite in the space of a concert hall or theater—and enjoy a pleasantly bittersweet time. (YAMAMURA Hitoshi, Curator)

人と作品、人と人、人と場所をつなぐ

Art Communication

美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場所になるように、さまざまなアート・コミュニケーション・プログラムを展開しています。今回は2023年に新たに映像を加え、リニューアルした、「Museum Start あいうえの」の活動を伝えるコンセプト・ムービーについて紹介します。

The Museum offers Art and Communication Project designed to take visitors beyond simple viewing to a deeper "experience" of the artworks. This time, we look at a concept movie introducing "Museum Start i-Ueno" activities, which has been updated by adding new scenes.

「Museum Start あいうえの」

コンセプト・ムービー

"Museum Start i-Ueno" concept movie

museum start

あ	い	う	え	の
---	---	---	---	---

since 2013

2015年に公開されたコンセプト・ムービー。それから約10年が経ち、JR上野駅公園改札の周辺や上野公園が整備され、登場する9つの文化施設にも変化がありました。「Museum Start あいうえの(以下あいうえの)」の10周年を機に、この動画をリニューアルしました。

A concept movie produced in 2015. Ten years having since passed, much has changed. Ueno Park and the Park Gate area at Ueno Station have been upgraded, and the Park's nine cultural facilities appearing in the movie have also undergone improvements. We therefore updated the movie on the occasion of the "Museum Start i-Ueno"s 10th anniversary.

「Museum Start あいうえの」とは？

What is "Museum Start i-Ueno"?

上野公園の9つの文化施設が連携して取り組む、6～18歳を対象にしたラーニング・デザイン・プロジェクト。子どもと大人が共に文化やアートに出会い、学びあう環境を創造しています。先生でも親でもない第3の大人「アート・コミュニケータ(とびラー)」と一緒に活動することも、特徴の1つです。

"Museum Start i-Ueno" is a learning-design project conducted jointly by nine cultural facilities in Ueno Park. Its aim is to create an environment where children and adults can learn together and from each other. The project supports children aged 6-18 in making their "museum debut" with their family or school group. The project's feature is its "art communicators" ("Tobira"): a third adult, neither teacher nor parent, who joins participants in activities.

「あいうえの」の冒険は続きます！

"Museum Start i-Ueno": the adventure goes on!

「あいうえの」は「すべてのこどもたちのミュージアム・デビューを応援したい」をミッションに活動が続けています。プログラムの対象は6歳～18歳(小学1年生～高校3年生)としています。

上野公園の9つの文化施設は、美術館、博物館、動物園、図書館、音楽ホールとさまざまな専門性を持ち、たくさんの作品や資料を所蔵しています。そのため一言でその魅力を伝えるのはなかなか難しいことです。そんな各文化施設の魅力を生き生きと伝え、こどもたちや保護者に行ってみたいと思ってもらえるようにするため、「あいうえの」がスタートして2年目の2015年に、各文化施設の楽しみ方を伝える動画を制作・公開しました。当時8歳の2人のこどもが各文化施設を巡るというストーリーです。大人が施設の魅力を紹介するのではなく、こどもたち自身が自分でみつけた発見を紹介していることが、この動画の特徴です。実はこの2人「あいうえの」のプログラムの参加者です。施設の紹介の中に出てくる「テイラノサウルスは毛が生えていた!?(国立科学博物館)」「キリンの首の骨は長いけど人間と同じ7こ(上野動物園)」といった言葉は、この2人がミ

ミュージアム体験をまとめる「あいうえの」のオリジナルノートに書き留めていた言葉です。

動画は、「あいうえの」のウェブサイトで公開し、プログラム実施時や講演会、教員研修で上映するなど、たくさんの方に見てもらう機会を持ってきました。

そして、動画を公開してから約10年が経ちました。その間、上野公園の再生整備の取り組みに伴い2020年には、JR上野駅公園改札(公園口)の位置が変わり、改札前は歩行者空間へと整備され、直接上野公園へ向かう動線となりました。また、上野動物園の整備工事や国立西洋美術館の前庭の改修工事、東京藝術大学の食堂もリニューアルされるなど、動画の中に登場する各施設の状況にも変化がありました。

そこで、2023年、「あいうえの」の10周年を機に動画をリニューアルしました。デビュー後も継続的に文化施設を楽しむための環境整備を行っている「あいうえの」らしい動画にするため、全てを新しく撮り直すことはせず、こどもたちが10年前も今も変わらず上野公園を楽しんでいるというメッセージを伝えることができるリニューアルを目指しました。登場する案内役もリニューアル前の動画に出演していた2人をお願いしました。2人は高校3年生に成長しており、幼いころの2人の発見と高校生になった2人の発見が交



2023年上野公園 Ueno Park in 2023

差することで、各文化施設の魅力がより広がる動画とすることができました。それぞれの年代での楽しみ方が、この動画をみる方に伝われば幸いです。(東京都美術館 学芸員 河野佑美)



Museum Start あいうえの
ウェブサイト

Museum Start i-Ueno website
<https://museum-start.jp/>



あいうえのコンセプト・ムービー

Museum Start i-Ueno concept movie
<https://museum-start.jp/movie>



2015年 In 2015 photo:Nakagawa Masako

To convey the charm of Ueno Park's nine cultural facilities and make children and adults want to visit them, we produced a movie in 2015 (Museum Start i-Ueno's 2nd year) demonstrating ways to enjoy the nine facilities. The movie follows two children, eight years old at the time, as they explore each facility. It is unique in the absence of supporting commentary by adults: it focuses entirely on discoveries the children themselves make.

On the 10th anniversary of Museum Start i-Ueno in 2023, we updated the movie. To keep it in character with Museum Start i-Ueno, a program endlessly introducing new ways to enjoy the facilities, we strove to update the video without reshooting it, wanting to convey the message that children still enjoy Ueno Park just as they did ten years ago. For this, we asked the two children previously appearing in the movie to perform as guides once again. The two are now young people in their third year of high school. By connecting their discoveries as children with their discoveries now as high school students, we were able to create a movie more fully conveying the charm of each cultural facility. Different generations, different ways to enjoy the facilities! We hope the movie makes this clear to viewers.

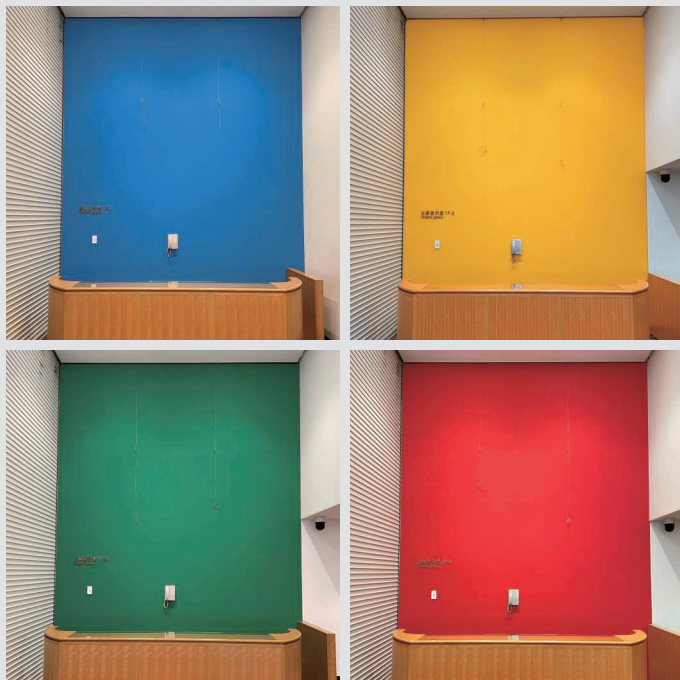
(KONO Yumi, Curator, Learning and Public Projects)

公募団体・学校教育展

東京都美術館は、年間約260団体の展覧会が開催される「公募展のふるさと」です。
美術団体や学校教育機関などが作る新しい作品との出会いの場をさまざまなトピックでご紹介します。

The Tokyo Metropolitan Art Museum is "the home of the public entry exhibition."
Each year, some 260 groups hold exhibitions here. Visitors can enjoy encounters with new works
by art groups and school education institutions, presented under a wide range of topics.

公募棟の4つの色について The Citizen's Gallery Wing's four colors



公募棟1階 公募展示室受付 (左上から順に第1棟、第2棟、第3棟、第4棟)

Citizen's Gallery Wing 1F. Reception counters (from the top left: Gallery 1, Gallery 2, Gallery 3, Gallery 4)

自然豊かな上野公園の中にある東京都美術館は、落ち着いたレンガ色が印象的ですが、建物の中に入ると、外観とは異なるあざやかな4つの色の壁が見えてきます。これらの色の壁は、公募団体の作品発表の舞台である公募展示室の会場入口の目印になっています。今回は、公募棟の色についてご紹介いたします。

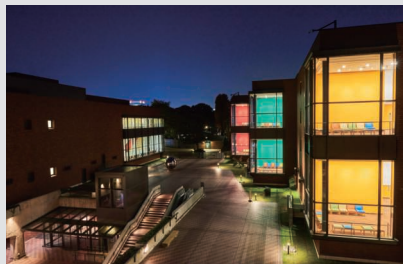
東京都美術館 は、1960年代後半以

降、団体の数や来場者数が増加していき旧館の会場では手狭となり、また老朽化も看過できず建て替えが決まります。1975年開館の新館公募棟の計画においては、より多くの公募団体が同時に展覧会を開催できる機能が求められました。それに応えるべく、建築家の前川國男が、ロビー階、1階、2階の3階建てで、同じ型の4棟を斜めにずらして配置する雁行型を採用

し、各棟の独立性を高めながら、12の展示室を有する公募棟を設計しました。また前川は、誰でもどの棟にいるのかすぐに分かるように公募棟の各棟に4つの色を用いました。公募棟第1棟は青、第2棟は黄、第3棟は緑、第4棟は赤が施されたのです。そのため1975年の竣工時に、この4色を見た建築関係者の間では、国鉄（現在のJR）の主要路線の車両の色を想起して「国鉄カラー・国電カラー」と呼んだ人もいたそうです。

これら4つの色は、左頁図版で示した展示室受付の壁のほか、階段やエレベーター、展示室前の休憩スペースも統一し配されています。正門横のマップや館内のフロアマップ・案内サインも同じ色が使われており、目印にする色と場所を確認することができます。また、エレベーター横のデジタルサイネージモニターでは、開催中の公募展を図示していますが、こちらも同じ色で区分けしていますので、目指す公募団体の展覧会をお探しの際は、ぜひご利用ください。

今回ご紹介した公募棟の色に導かれ



東京都美術館 外観 中央棟側から撮影（正門正面 右手公募棟 手前より第2,3,4棟）

Tokyo Metropolitan Art Museum, exterior view from the Central Wing (Citizen's Gallery Wing on the right; Galleries 2, 3, 4 from foreground back)

て公募展をお楽しみいただいた後は、展示室前の休憩スペースで「青・黄・緑・赤」の椅子で一息つくのはいかがでしょう。そして、お帰りの際は、エスプラナード（1階中庭）から昼と夜で表情が変わる公募棟をご覧ください。日が沈むと「青・黄・緑・赤」の壁の色が夕闇に浮かびあがり、あざやかな夜景をお楽しみいただけます。位置によっては見え方や見える色が変わりますので、お好みのスポットをぜひ探してみてください。

（東京都美術館 交流係 中田歩）

Let us explain the four colors of the Citizen's Gallery Wing, a platform for art groups to show their works. This wing consists of 12 galleries arranged "flying geese" layout on two above-ground floors and one underground floor. Citizen's Gallery 1 is painted blue; Citizen's Gallery 2, yellow; Citizen's Gallery 3, green; and Citizen's Gallery 4, red. MAYEKAWA Kunio, the Museum's architect, took this approach to enable visitors to promptly know which gallery they are in. Each color appears uniformly throughout its gallery, on reception counter walls, along stairways, and at elevators. They also appear on the map by the main gate and on floor maps and signage inside

the Museum, so visitors can locate the gallery they want using the colors as landmarks. Please refer to them when looking for an art group's exhibition.

After seeing the exhibition, be sure to take in the view of the Citizen's Gallery Wing from the esplanade, which changes dramatically between day and night. At night, you can enjoy striking scenery of the "blue, yellow, green, and red" wall colors illuminated in the dusk. The appearance and colors vary, depending on your location, so try finding your favorite viewpoint.

(NAKADA Ayumi, Creative Connections Section)

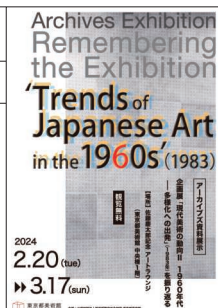
2023年度 アーカイブズ資料展示

Archives Exhibition

企画展「現代美術の動向Ⅱ 1960年代—多様化への出発」 (1983年)を振り返る

"Remembering the Exhibition

'Trends of Japanese Art in the 1960s' (1983)"



1980年代の東京都美術館では、「現代美術の動向」と題するシリーズとして、1950年代から70年以降の美術まで、その動向を探る企画展が3回にわたり開催されました。シリーズ第2弾にあたる「現代美術の動向Ⅱ 1960年代—多様化への出発」(1983年)では、高度成長と大衆化社会を背景に多種多様な傾向が生まれた1960年代に焦点をあて、荒川修作、菊畑茂久馬、赤瀬川原平をはじめ、60名におよぶ作家の作品が展観されました。

60年代美術を振り返る1983年の企画展をさらに振り返る——昨年度のアーカイブズ資料

展示ではそれを試みました(会期:2024年2月20日～3月17日)。会場では展覧会ポスターや図録をはじめ、工藤哲巳ら出品作家や美術評論家による寄稿文など展覧会の関連記事が収録された広報誌『美術館ニュース』や、展示風景の記録写真、また当時の学芸員への聞き取りや記録写真をもとに再構成した展示図面を紹介しました。かつては前衛美術の舞台となり、1970年代以降は日本の近現代美術を意欲的に紹介してきた東京都美術館の活動を多層的に紹介する機会となりました。

(東京都美術館 学芸員 小林明子)

In the 1980s, the Tokyo Metropolitan Art Museum held a series of three special exhibitions titled "Trends of Japanese Art" that explored art trends from the 1950s to the 1970 and beyond. The series' second exhibition, "Trends of Japanese Art in the 1960s" (1983), surveyed the varied art trends that came to the fore in a decade of rapid economic growth and social development. Featured were works by 60 artists, including ARAKAWA Shusaku, KIKUHATA Mokuma, and AKASEGAWA Genpei.

The Archives Exhibition 2023 took a further look at the 1983 exhibition. Featured were the exhibition poster and catalogue,

and the "Tokyo Metropolitan Art Museum News" PR magazine containing articles on the exhibition by art critics and exhibiting artists such as KUDO Tetsumi. Featured also was a reconstruction of the exhibition's installation plan based on photographs of venue scenes and interviews with curators active at the time. The Archives Exhibition gave viewers an opportunity to examine, from multiple angles, the activities of the Tokyo Metropolitan Art Museum, which became a stage for avant-garde art for a period, and which from the 1970s ambitiously introduced modern and contemporary Japanese art.

(KOBAYASHI Akiko, Curator)

TOPICS

Official YouTube Channel
公式YouTubeチャンネル

東京都美術館 YouTubeチャンネルのご紹介

Introducing the Tokyo Metropolitan Art Museum YouTube channel



東京都美術館のYouTubeチャンネルをご存知ですか？ いつでも好きな時に、動画でさまざまな情報が入手できるYouTubeは、私たちの生活に浸透してきました。東京都美術館のYouTubeチャンネルでは、美術館の歴史や収蔵品のことをわかりやすく説明した動画や、学芸員による自主企画展のみどころや解説、アーティストインタビューなどを公開しています。

「佐藤慶太郎と東京都美術館のあゆみ」では、「東京都美術館生みの親」と呼ばれた実業家の佐藤慶太郎の志と、その意志を受け継いだ東京都美術館の歴史を紹介しています。また、「井上武吉《my sky hole 85-2 光と影》1985年」では、美術館のシンボリックな存在として人気の高い《my sky hole 85-2 光と影》について学芸員がご紹介しています。

東京都美術館では、今後も作品鑑賞や展覧会を味わうために参考になる動画コンテンツの公開を予定しています。東京都美術館YouTubeチャンネルにご期待ください。

(東京都美術館 広報担当係長 小倉明紀子)

Introducing the Tokyo Metropolitan Art Museum YouTube channel, which offers clear explanations of the Museum's history and collected works, curator commentary on special exhibitions, and interviews with artists, all on video. Besides a video overview of industrialist SATO Keitaro, "the father of the Tokyo Metropolitan Art Museum," and the history of the Tokyo Metropolitan Art Museum, which embodies his dream, the channel offers a curator's introduction to *my sky hole 85-2: light and shadow* (INOUE Bukichi, 1985), a popular work and symbol of Museum, and other video content helpful in appreciating artworks and exhibitions.

(OGURA Akiko, Chief of Public Relations)



東京都美術館 YouTubeチャンネル

Tokyo Metropolitan Art Museum
YouTube channel
<https://www.youtube.com/@tokyometropolitanartmuseum7280>

ヨコオカフェ 店主

横尾 亘さんYokoo Wataru
Proprietor, Yokoo Cafe

下町の風情を残しつつ、最先端の店も軒を連ねる上野界隈。
今回は東上野のヨコオカフェの店主が
まちの魅力を紹介します。

The Ueno area features many trendy shops while retaining the
mood of Tokyo's old downtown quarter.
This time, the proprietor of Yokoo Cafe in Higashi Ueno introduces
the Ueno District's charms.



平日は17時半、土日は12時
オープン。「サイクリング途中で
休んでいかれる方、お友達と
おしゃべりに興じる方、そして
私たち夫婦とコーヒーや自転
車談義を楽しんでくださる方
も。皆さんに思い思いの時間
を過ごしていただければと思
います」と店主の横尾亘さん

The cafe opens at 5:30 pm
weekdays and 12 pm Saturdays
and Sundays. "Whether taking a
break from cycling, chatting with
friends, or enjoying coffee and
talking bicycles with my wife and
I, we hope you will freely spend
your time as you please," says
Yokoo Wataru, the proprietor.

東上野・老舗サイクルショップの新たな挑戦 上質なコーヒーと憩いの空間が人とまちの架け橋に

A long-standing cycle shop in Higashi Ueno finds a new direction
High-quality coffee and a relaxing space for community exchange

もともとうちは、1階がロードバイク愛好家の
方やプロのレーサー向けのサイクルショップ
(横尾双輪館)で、2階ではヘルメットやウェア
などのグッズを扱っていました。ところがネット
で買われる方が多くなり、さらにコロナ禍が追
い打ちに…。そこで新たな一手として2階を改
装してカフェを開くことに決めました。その頃上
野では、コロナ禍や後継者問題もあって喫茶
店が何店舗も閉店。「落ち着いてコーヒーを飲
める場所がほしい」という声を耳にするよう
になり、まちを活気づけたい、皆さんが集える場
所にしたいという思いもありました。

カフェには、サイクルショップのお客様をはじ

め、カフェ巡りが趣味という方、美術館帰りの
方など、さまざまなお客様がいらっしゃいます。
お客様同士がおしゃべりに花を咲かせる様子
を見たり、「ここができて嬉しい」と言って足し
げく通ってくださるお客様に接すると、カフェを
開いてよかったと心から思います。

店のオリジナルブレンドコーヒーは、焙煎士
の方に豆選びから焙煎までプロデュースしてい
ただきました。おかげさまで、このコーヒー目当
てに来てくださる方は多いんですよ。

大事にしているのは、お客様に心地良く過ご
していただくこと。コーヒーを片手に静かに本を
読んでいらっしゃる方にはとことんゆっくり過ご

していただきますし、カウンター席に座って私たちに話しかけてくださる方とは会話を楽しんでいます。自転車にしてもコーヒーにしても、愛好家の方が持つ情熱と知識量は相当なもので、お話を伺うと勉強になることも多いです。

お客様のなかには「下のショップが気になっていただけれど、プロ仕様だから今まで気後れして入れなかった」と言われる方もいて、カフェを足がかりにサイクルショップものぞいてくださるようになった、なんてこともあります。

また、近所の方が来てくださるようになり、親交が深められたのも嬉しい収穫でした。これからもこのカフェが、地域交流の場になれるよう願っています。

私は半世紀近く上野に住んでいます、この辺りは交通の便がいいし、古い街並みや歴史深い寺社、最新の商業施設や文化施設もあるなど、さまざまな顔を持つまちなので、何年住んでいても飽きることはないですね。幼馴染ともいまだに付き合いがあり、友人が営む蕎麦屋には週1で通っています(笑)。

皆さんにおすすめしたいのは、朝の上野公園。人が少ない早朝の上野公園は、空がとても高く感じられて気持ちがいい。まちが動き始める前の上野公園で、広い空と清々しい空気を皆さんも一度味わってみてください。

カフェはまだ3年目ですが、サイクルショップは来年で創業100年を迎えます。1926年誕

生の東京都美術館は1つ歳下ですね(笑)。都美は、私もうちの子どもたちも小学校時代に描いた作品を展示してもらった思い出のある美術館です。これからお互い次の100年に向けて歴史を重ねていけたらいいですね。



ヴィンテージのフレームや小物がスタイリッシュにディスプレイされた空間。テーブル同士の間隔が広く、居心地の良さが評判だ

A space with stylish displays of vintage frames and accessories. The tables are spaced apart and highly regarded for their comfort.



横尾双輪館のオリジナルバイク「ホルクス」と同店のイメージカラーの青から名付けられた「ホルクスブルー」は、香高くコク深い味わいの一杯。野菜ソムリエでもある妻の未来(みき)さんが手掛けるフードメニューも大人気

"HOLKS BLUE" is a fragrant coffee with a rich taste named after CYCLES YOKOO's own original bicycle, "HOLKS," and the shop's blue image color. The food menu prepared by his wife, Miki, a vegetable sommelier, is also very popular.

Originally, we were a cycle shop for road bike enthusiasts and professional racers on our first floor and handled cycle goods on our second floor. Due to the rise of Net sales and spread of the COVID-19 pandemic, however, we decided to renovate the second floor and open a cafe. I also wanted to liven up the town and create a place where everyone could gather.

When I see customers in the cafe chatting merrily and dropping by often, saying, "I'm happy this place is here," I get a deep feeling of gladness that I opened this cafe. Among them are people who say, "I was interested in the shop below but hesitant to go inside, until now," and begin visiting the cycle shop using the cafe as a steppingstone. I really hope the cafe will remain a

place for community exchange.

I have lived in Ueno for nearly half a century and never get tired of it, no matter how many years I live here. I highly recommend that people visit Ueno Park in the early morning when there are less people. The sky is very high and feels really good.

The cafe is still in its third year, but the cycle shop will be 100 years old, next year. The Tokyo Metropolitan Art Museum is one year younger. Both my children and I have fond memories of drawing and exhibiting artworks at the Museum when we were in elementary school. I hope we and the Museum can both keep our history going another 100 years.



あの日・あの時 Playback! TOBI

※東京都美術館は2026年に100周年を迎えます。

東京都美術館では1987年に子供のためのワークショップとして、「夏休み子供アトリエ 不思議の国の動物図鑑」が開催されました。彫刻家の米林雄一氏を講師に迎え、小学校4年生から6年生までの48名がグループに分かれ、共同制作により空想の動物、夢の動物を作りました。100枚あまりの動物のスライドとシンセサイザーによる動物の鳴き声でイメージを膨らませた子供たちは、おのあの絵を描いた後、アルミニウム針金、エアークラップ、ポスターカラーを素材に話し合って決めた空想の動物を協力してかたちにしていきます。完成した動物は館外パレードでお披露目されたあと、開催中の収蔵作品展「親子で見る現代美術」の会場に展示されました。

(米岡響子)



夏休み子供アトリエ「不思議の国の動物図鑑」
1987年撮影

Children's Summer Vacation Atelier "Animal Picture Book in Wonderland," 1987 photo

In 1987, the Tokyo Metropolitan Art Museum held a workshop for children titled "Children's Summer Vacation Atelier: Animal Picture Book in Wonderland." With sculptor YONEBAYASHI Yuichi as a lecturer, 48 elementary school students of grades four to six were divided into groups and worked together creating imaginary and dream animals. The completed animals were unveiled in a parade outside the Museum, then displayed in the venue of "Contemporary Art for the Children and Grownups," an ongoing exhibition of collection works. (YONEOKA Kyoko)

東京都美術館 ニュース No.479

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日 2024年11月30日
発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館
企画・編集 東京都美術館 広報担当
デザイン 株式会社ファントムグラフィックス
翻訳 アムスタッツ コミュニケーションズ
印刷 望月印刷株式会社

©Tokyo Metropolitan Art Museum

*最新情報は公式サイトで
ご確認ください



*バックナンバーは
こちら



東京都美術館

〒110-0007

東京都台東区上野公園8-36

Tel 03-3823-6921

Fax 03-3823-6920

公式サイト

<https://www.tobikan.jp>

X(旧Twitter)

[tobikan_jp](#) [tobikan_en](#)

Facebook

[TokyoMetropolitanArtMuseum](#)

Instagram

[tokyometropolitanartmuseum](#)

表紙の
作品

ジュアン・ミロ《ヤシの木のある家》1918年、油彩／カンヴァス
国立ソフィア王妃芸術センター、マドリード

Joan Miró, *House with palm tree*, 1918, Oil on canvas

Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía, Madrid

Archivo Fotográfico Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía, Madrid

© Successió Miró / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2024 E5591

